

## 16年前の大地震をいまもう一度味わっています

通信の3号を書こうとしていたところ、東北・関東地方で大地震が起きました。当初書く予定にしていたことはぶっ飛んでしまいました。ここから遠い地での地震とはいえ、いま被災している人たちの悲境を考えると、16年前に大地震に直撃されて、言葉で説明できない体験を味わってきた私たちは当然のことながら、そのことを見ないようにして、なにかを書いてみようという気は全く起こりません。

今回の地震の報道に接して、ほとんどの人にあの地震のときの記憶が鮮明によみがえり、こみあげてくるものをこらえながら、テレビを見つめていたと思われまふ。けっして忘れてはいなかったし、忘れられない出来事であったのですが、今回改めてさまざまなことが走馬灯のように脳裏を駆けめぐっていたにちがひありません。早く過ぎ去ってほしい、忌まわしい記憶が多かったでしょうが、16年間の日々の暮らしのなかで少しずつその記憶から遠ざかってきたと思われまふ。

生き残った者たちの生活を一刻も早く立て直すために、歯を食いしばって、辛い気持をこらえながら、記憶を心の奥底に封印してきたと推測されますが、今回の大地震はおそらくその記憶を改めて深いところから掘り起こしたのではないのでしょうか。地震はその地で起こっただけでなく、16年前に起こったところでももう一度起こっていると考えられます。そのことは16年前の私たちだけでなく、それ以前やそれ以降に地震のみならず、水害等の災害を被った人たちにも同様です。

巨大津波の発生で行方不明者がおびただしいのが、今回の震災の特徴ですが、偶然に命の危険を免れた人たちが家族の安否を尋ねまわっている姿がテレビに映しだされると、半世紀以上前の戦争による大空襲で同じような場面があったことを思い出して、いたたまれなくなった高齢者もいたのではないかと想像します。個人的な災難に出会った人も、我が子を探しつづける親の切羽詰まった姿に、涙がこみあげてきて嗚咽を漏らさずにはおれなかったのではないのでしょうか。

永年生きていると、どうも喜びを上回る辛いことに何度も直面してきたような気がしてなりません。喜びよりも辛いことのほうが多いことに不公平さを感じますが、たぶんそれは回数の問題ではなく、人間には喜びを受け入れる心地よさよりも、辛いことを受け入れる苦痛のほうがどうしても大きく感じられるからではないかと考えまふ。喜びを受け入れたい気持よりも、苦痛を回避したい気持のほうが上回っているからではないのでしょうか。

喜びが大きすぎて気が変になる人はたぶんいないでしょうが、苦痛が大きすぎて気が変になる人は確実にいます。人間は苦痛には強くないのです。胸をかきむしられるような辛い目に遭ってきた人は、悲痛な記憶を心の奥底に沈めなければ、生きていけないでしょう。いつまでも忘れずに生きつづけるようとするなら、気が狂ってもおかしくありません。忘れることも必要なのです。それは、生きるための方便のような気がしまふ。

生きるためには、忘れるように努めることも必要になってくるでしょう。自分でかかえこむことのできる許容量を越える悲しみに直面した場合、無理してでも忘れようとしなければ、自分が壊れてしまひまふ。人間の自衛本能として忘れることは自然なのです。そのようにして人間は生存の危機を乗

り越えてきたのでしょうか。16年前に大地震に直撃された私たちも、忘れてはならないと自分を戒める一方で、忘れようとしてきたと思います。

ここまで進めてきましたが、どうも書きづらいので、私と仲間が編集した資料集3号（1995年8月14日発行）をめくっていると、(110)「日本人論」の項目に次のような文章が引用されています。《阪神大震災の惨状をテレビで見ている、最も心を打たれたのは、被災した人々の節度ある振る舞いだった。人々はあくまで冷静に、しかも落ち着いて行動しているように見えた。人々のゆったりとした関西弁の口調が、極限状態の緊迫感を和らげていたように思う。予期せぬ大惨事に遭遇してパニックに陥っても、決しておかしくない状況である。ところが、パニックは起きず、略奪行為も発生しなかった。むしろ救援が遅れたために、地元の人々が自力で助け合う場面が目立ったという。

被災者の家族がテレビを通じて、安否を気遣う親類や知人に対して無事であることを知らせる番組を見た。出演した被災者は、それぞれが被害を受け不自由しているにもかかわらず、口々に「元気だから心配しないで」と呼び掛け、周囲への心配りすら見せていた。何という精神的ゆとりだろう。

ちょうど1年前のロサンゼルス大地震をはじめ、外国での大災害の惨状を伝えるテレビを見ている、いつも映し出されるのは、我を忘れて泣き叫び、取り乱す被災者の姿である。ところが、阪神大震災の被災者は違っていた。本紙がまとめた諸外国のメディアによる地震の報道ぶりを見ると、他国のそれと比べて日本での被災者の対応が、あまりにも違うことに、戸惑いと驚きを隠せないようにみえる。阪神大震災は、どうやら「日本人論」にも一石を投じたようだ。》

このような被災者の姿に、評論家は芥川龍之介の短篇小说『手巾』を思い出している。《息子を病で失った母が、恩師の家を挨拶に訪ねる。母親は美しい微笑をたたえたまま話す。だがテーブルの下で、彼女の膝の上の一枚の手巾ハンケチは悲しみを耐えるため、ち切れるほど握りしめられ、ふるえていた。芥川は、これを武士道の型だとし、(…)

しかし、人間の力で、どうにもならない息子の死を前にしたときのこの母親は「目には涙もたまっていない。声も平生の通りである。その上口角には微笑さえ浮かんでいる」。この姿は、そのまま被災地の日本人の姿に重なってくる。

戦災の時も同じ姿と微笑があった。いったいこれは何であろうか。たしかに教育や習慣もあるだろう。しかし、もっと深い心の奥に、日本人は、天災地震や死というものを、個人に加えられた加害とばかり受けとらない構造が、何千年、何万年という間に育まれてきているのではないだろうか。それを「和」というなら、人間と人間の間の「和」だけではない。芭蕉が「造化」と呼んだ天然宇宙の運行の中に身心をおいて、それを受け入れ共に生きているという実感が秘められているのではないだろうか。》

つづいて、文政11（1828）年旧暦11月12日、越後の三条を中心に起きたマグニチュード7の大地震（死者1600人、負傷者1400人）の見舞い状での、「災難に逢う時節には災難に逢うがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。是はこれ災難をのがるる妙法にて候」と述べた良寛と、道元禅師の『正法眼蔵』の中の、「生来せいたらば、ただこれ生めつ。滅来たらば、これ滅めつに向かいて仕つかうべし。厭いとうことなかれ。願ねがうことなかれ」という言葉を、被災者の姿に重ねて受けとめています。このような日本人の振る舞いを感嘆の一方で、「GAMAN」に対する批判の声が、海外に見られることも付け加えます。